

第二十四回 猛張飛智もて瓦口隘を取り、対山を占めて黄忠逸もて勞を待つ

— 漢中争奪戦（一） —

（前回から今回まで）

前回の「濡須口の戦い」から戻った曹操は、漢中に留めた張部に巴郡の平定に向かうよう命じます。この知らせに、荊州で呉軍と対峙していた劉備は、いそぎ荊州南部の分割を協定して蜀へ戻ります。

そして、張飛に命じて張部にあたらせませす。かくして、曹操と劉備との漢中争奪戦の序盤がはじまります。

張飛は緒戦で伏兵をもうけて張部をやぶります。敗れた張部は、それからは山上の砦にこもり、一向にでてこようとしません。そこで、張飛は、張飛らしからぬ一計を案じて張部を誘い出します。

（本文）

次の日、また張飛が戦いを挑んだが、張部はやっぱり出て来ない。張飛が兵士に命じ口を

きわめて罵倒ばとうさせると、張郃もまた山上から罵ののり返す。張飛は何かいい方法はと考えたが、手の打ちようがない。

こうして五十日余り、張飛は山のすぐ前に大きな陣營を作つて、毎日酒を飲み、ぐでんぐでんに酔つぱらつては、山の麓ふもとに座り込み喚わめきちらした。

劉備からの陣中見舞いの使者がやつて来たが、使者は張飛が一日じゅう酒を飲んでゐるのを見て、帰つて劉備にこの旨、報告した。劉備はびつくりして諸葛亮に相談すると、諸葛亮は笑いながら言つた。

「おお、そうでしたか。おそらく陣中にはうまい酒がないでしょう。成都には美酒びしゆがたくさんありますから、五十かめ瓷ばかり三台の車に乗せて送りとどけ、張將軍に飲んでもらいましう」

「弟はこれまで酒で失敗してきたのに、どうして酒を送ろうとされるのか」と劉備。

「殿には翼徳よくとくどのと長年、兄弟の間柄でいらつしやるのに、まだその人物がわかつておられません。翼徳よくとくどのはこれまで剛勇ごうゆう一本やりでしたが、蜀を手に入れる前、義によつて敵顔げんがを許されたのは、とても剛勇一本やりでできることではありません。今、張郃と五十日以上も対峙し、酒に酔つては山の前で喚わめきちらすという傍若無人ぼうじやくぶじんな態度は、酒に溺おぼれてのことで

はなく、張郃を打ち破るための計略です」と諸葛亮。

諸葛亮は魏延に張飛の軍中まで酒を運ぶように命じ、車の上に大きな字で、「陣前公用の美酒」と記した黄色い旗を立てて行けと申しつけた。魏延は命令を受けて陣中に酒をとどけ、張飛と顔を合わせると、殿からの贈り物だと伝えた。

張飛は喜んで受け取ると、魏延と雷銅にそれぞれ一手の軍勢を率いて、左翼・右翼に位置し、本陣で紅旗が上がるのを合図に、ただちに進軍せよと申しつけた。

そのうえで、陣幕の下にずらりと酒を並べ、兵士に命じて旗を立て太鼓を鳴らさせながら、酒を飲んだ。

間者が山に上ってこの様子を報告したので、張郃みずから頂上へ行って眺めたところ、なんと張飛は陣幕の下に座って酒を飲み、目の前で二人の兵士に相撲をとらせて楽しんでいではないか。

張郃は「張飛め、私を馬鹿にするにもほどがある」と言い、今夜、下山して張飛の陣営を襲撃すると命令を出した。また、蒙頭と蕩石の二つの砦にも出撃して左右から救援せよと命じた。

その夜、張郃はおぼろな月明かりに乗り、軍勢を率いて山を下り、まっすぐ張飛の陣営の

前へ押し寄せた。見ると、張飛が煌々こつこつと灯りをつけ、陣幕のなかで酒を飲んでいるではないか。張郃は先頭に立って大声を張り上げ、山麓の軍勢が太鼓を打ち鳴らしてこれに呼应し、そのまま陣中に突入した。

ところが張飛はじつと座って動かない。張郃は馬を飛ばして、その前まで行き、鎗で突き倒したところ、なんとそれは藁人形わらにんぎょうだった。

張郃が慌てて馬首をめぐらし退却しようとしたところ、陣幕の裏からつづけさまに火砲が発射され、一人の大将が行く手をさえぎった。まんまるのドングリ眼、雷のような大音声、これぞ張飛である。

張飛は矛をかまえ馬を飛ばして、まっすぐ張郃に打ちかかり、両将は火の光のなかで数十合戦した。張郃はひたすら蒙頭・蕩石の援軍が来るのを待ち望んだが、この二つの砦からの援軍は、とつくに魏延と雷銅に蹴散らされており、二人はそのまま砦を奪い取っていたのである。

張郃は援軍が来ないのでどうしようもなく、そのうえ山の上からも火の手があがったかと思つと、自分の砦もまた張飛の軍勢ぐんせいに奪われてしまった。張郃は、やむなく瓦口関がこうかんへと落ちて行つた。

大勝利を得た張飛は、この旨、成都に報告した。劉備は大いに喜び、ようやく張飛が酒を飲んだのは、張郃を山からおびき出すための計略だったことを悟ったのだった。

(解説)

この場面は、これまで酒で失敗することの目だった張飛が、酒に酔っぱらった姿をわざと張郃に見せて、だまされた張郃がうかうか出てきたところを打ち破ったのです。

『三国志』には張飛の酒にまつわる話は一切ありませんが、『三国志演義』の世界では、張飛と酒は切っても切り離せない関係にあります。

張飛は酒を飲んでよく騒動を起こしますが、その最たるものは、劉備に酒を飲まないと誓いながら、その舌の根も乾かぬうちに酒を飲んでしまい、それがもとで呂布に徐州を奪われ、関羽に怒られた張飛はみずから命を断とうとしますが、劉備に「兄弟は手足のごとし」と止められ、三人が手を取り合ってむせび泣く場面でした。

しかし、諸葛亮は、張飛が劉璋の部将嚴顔げんがんを心服しんぷくさせたのを見て、張飛の成長ぶりを認めています。そして、これは張飛の計略だと察し、心配する劉備を尻目に、車に酒を満載して張飛に送り届けます。

続く戦いにも敗れた張郃は、曹操軍の拠点である南鄭なんていまで退きます。曹操軍の総大将の曹洪は、張郃に再び、劉備側の拠点である葭萌関かぼうかんの攻撃を命じます。

張郃が再び葭萌関へ向かったとの知らせに、劉備は二人の老将、黄忠こうちゆうと嚴顔を葭萌関の応援に向かわせませす。

このとき、黄忠は年齢が七十になろうとしていました。黄忠は、荊州の長官であった劉表に仕えていましたが、長沙ちやうさで関羽に降伏しています（「関雲長義もて黄漢升を釈す」）。黄忠は老いをもとせせず、同じく老将と設定される嚴顔げんがんとともに葭萌関に向かいます。史実では、嚴顔は生没年は不詳で、老将という表現もありません。

葭萌関の守将孟達もうたつの、なぜこんな老将をよこしたのかと言わんばかりの態度に、黄忠と嚴顔げんがんの二人は俄然闘志を燃やし、大手柄を立ててギャフンと言わせてやろうと声を掛け合います。

そして最初の一戦で、見事に張郃を打ち破ります。これを聞いた曹洪は、夏侯尚かうしやうと韓浩かんこうを救援に向かわせませす。

（本文抄）

韓浩が軍勢を率いて向かつて来ると、黄忠は刀をふりまわしてまっすぐ打ちかかり、たった一太刀で韓浩を馬から斬り落とした。蜀軍の兵士は大喚声をあげながら、どつと山上へと攻め上つて来たため、張郃と夏侯尚は慌てて軍勢を率い迎え撃とうとした。そのとき突然、山かげから鬨とぎの声があがり、天にとどく火炎かえんが立ちのぼったかと思うと、あたり一面真っ赤になつた。

夏侯徳は軍勢を引き連れ消火に駆けつけたとき、ばったり老将嚴顔と出くわした。嚴顔の手が上がり刀がふりおろされた瞬間、夏侯徳は馬からばつさり斬り落とされていた。

なんと黄忠は前もつて嚴顔に、軍勢を率いて山かげに潜伏し、黄忠の軍勢が到着するのを待つて、山積みにした柴や草に火をつけるよう命じていたのだった。かくして柴や草にいっせいに火がつき、はげしい炎が燃え広がり、山や谷をあかあかと照らし出した。嚴顔は夏侯徳を斬り殺すと、山の裏からドツと攻め寄せて来た。

張郃と夏侯尚は前後から敵の攻撃を受けてささえきれず、やむなく天蕩山てんとうざんを放棄して、定軍山ていぐんざんの夏侯淵のもとに落ちのびて行つた。

黄忠と嚴顔の二人の老将は、葭萌関につづき天蕩山でも張郃を退ける大活躍をしますが、これは『三国志演義』のフィクションです。

劉備は、天蕩山てんとうざんが陥落するとみずから漢中に向かいます。時に建安二十三年（二一八）七月のことです。そして、劉備は、黄忠に夏侯淵が扼よる定軍山ていくんざんの攻略をまかせます。

諸葛亮は、黄忠の高齡を危懼きぐしますが、黄忠は、「昔、廉頗れんぱ（戦国時代の趙の將軍）は八十になっても、なお一斗の飯、十斤の肉を食べました。諸侯はその剛勇を恐れて、趙ちやうの国境を侵そうとしなかったのです。まして私はまだ七十にもなっていないではありませんか」と黄忠は奮い立って答えたのです。

七十歳の高齡で大言壮語の大風呂敷おおぶろしき、しかも、その風呂敷をちゃんと包んでしまおうという、高齡者の鏡のような黄忠です。劉備は亡くなるときに、五十歳まで生きれば短命といえないと言っていますので、当時は「人生五十年時代」だったといえるでしょう。七十歳の黄忠ですが、戦いに対する情熱が衰えることはありませんでした。黄忠の姿を見てみると、「人生は七十からだ」と言いたくなります。老いてもさらに大きな仕事なしとげようというきが気概は見習いたいのもです。

新井宝雄あらいたけお氏は、黄忠が中国の人々の間に生きているエピソードを書かれています（『革命

児周恩来の実践』新井宝雄、潮出版社）。

中国の周恩来総理が六十歳のころ、年配の幹部たちとともに堤防工事に汗を流します。そのグループは「黄忠隊」と呼ばれて、尊敬を集めていました。ある日、作業の休憩中に、青年たちから、「黄忠隊の皆さんで、何かだしものをやってください」と声がかかると、ある幹部が、こうつぶやきます。「歌か。そりやあもう二十年も前のことで、いまはもうだめだよ」と。

その時、周総理が立ち上がって言います。

「二十年前に歌えたのに、二十年后に歌えない、ということがあるかね。それはつまり『もうろく』したというものだよ。もう少し元気をだして、あの延安時代の意気えんあんごみで、ひとつおおいにやろうじゃないか」

周恩来は大きく両手をふって、みんなで大きな声で歌い始めた、と。

「黄忠隊」とは、いうまでもなく「三国志」の老将黄忠のことです。

さて、漢中での戦いが続きますが、こちらは黄河流域の平原地帯また長江流域の湖沼地帯こしやうと違って、山岳地帯での戦いになります。『三国志演義』を読んでも、戦いが、これま

での「官渡の戦い」や「濡須口の戦い」などとはかなり違った様相になっていることに気づきます。

漢中の地形は、有名な李白の詩「蜀道難し」に（以下、一部抜粋）、

上には六龍回日の高標有り

下には沖波逆折の回川有り

黄鶴の飛ぶこと 尚過ぐるを得ず

猿柔度らんと欲して攀縁を愁ふ

上にあるのは、六龍が引く太陽の車でさえ迂回せざるを得ない峰峰、下にあるのは、水しぶきをあげて逆巻く激流、鶴が飛び越そうとしても飛び越せず、サルが攀じのぼろうとしても落ちてしまうありさまだ

漢中は北には二千メートル級の険しい山々が連なり、両軍とも拠点を難攻不落の地に築きますので、戦いはこの敵の拠点を一つずつ攻略していかねばならず、たいへん苦勞の多い戦いになります。これが、漢中の戦いの特徴です。

曹操は、前の張魯の討伐に続いて今回の漢中争奪戦と、二回、この漢中の地にやってきました

す。

『三国志演義』は、戦いが個別に描かれていて経緯がわかりにくいため、『資治通鑑』で曹操と劉備の漢中争奪戦を年代順にまとめてみます。

○二一七年 劉備、漢中に進出

二一五年、曹操は張魯ちやうろを降して漢中を平定しますが、夏侯淵かこうえんと張郃ちやうこうを残して、曹操自身は帰還していきま。その二年後に、劉備は自ら漢中に出陣します。

○二一八年

四月、劉備、陽平関ようへいかんで張郃と戦う

劉備は陽平関に駐屯し、夏侯淵・張郃と対峙します。劉備は張郃を攻撃しますが勝てず、諸葛亮に増援を要請します。

七月、曹操は自ら大軍を率いて出発

九月、曹操は長安に到着

○二一九年

一月、劉備は定軍山ていぐんざんで夏侯淵と戦い、このとき、黄忠が夏侯淵を斬る（定軍山の戦いていぐんざん）

三月、曹操は斜谷やこくに進出して劉備と対峙、趙雲が曹操軍を破る

曹操は劉備と一月余り対峙したが、曹操軍から多数の将兵が逃亡

五月、曹操は全軍を率いて、長安に帰る

ここに、劉備はついに漢中かんちゅうを手に入れる

七月、劉備、漢中王かんちゅうおうとなる

『三国志演義』は、史実通りの展開にはなっていない。

劉備はまず張飛と馬超を出撃させ、その後みずから出撃します。かたや曹操は、夏侯淵・曹洪・張郃らに迎え撃たせますが、つづいて自ら漢中へと向かいます。この戦いは、一進一退はありますが、比較的、劉備側優勢のもとに推移すいします。

続いて、黄忠が大活躍する「定軍山の戦いていぐんざん」が始まります。

（本文抄）

黄忠は定軍山ていぐんざんの麓まで攻め寄せ、法正ほうせいに相談したところ、法正は指さしながら言った。

「定軍山の西に高い山がそびえています。四方はすべて険しい山道ですが、山上から定軍山の様子を見て取ることができません。あの山を取ることができれば、もはや定軍山は手に入つたも同然です」

黄忠が仰ぎ見ると、山の頂上は狭い平地になっており、わずかの軍勢がいるようだった。その夜の二更（午後九時から午後十一時の間）、黄忠は兵士を率い、銅鑼や太鼓を打ち鳴らしながら、頂上めがけて攻め登つた。

この山は夏侯淵の部将杜襲としゅうが守備していたが、守備兵はわずか数百にすぎず、このとき、黄忠の大軍が押し寄せて来るのを見ると、やむなく山を放棄して逃げ出した。

黄忠が頂上に立つと、ちょうど目の下に定軍山が見えるではないか。

と、法正は言つた。

「將軍は山の中腹ちゅうふくにいてください。私は頂上にいます。夏侯淵の軍勢がやって来たら、白旗をあげて合図しますが、將軍は軍勢をおさえ動いてはいけません。敵が疲れて備えをしなくなつたら、紅旗をあげますから、將軍にはただちに山を下りて攻撃してください。これぞ『逸いつを以て勞ろうを待つ（力を養つたうえで疲れた敵に当たる）』（『孫子そんし』）であり、勝利まぢがいなしです」

黄忠は大いに喜び、この計略に同意した。

さて、杜襲は軍勢を率いて逃げ帰り、夏侯淵と会って、黄忠に向かいの山を奪われたことを報告した。

夏侯淵かこうえんは激怒し、「黄忠が向かいの山を占領した以上、出陣して戦わないわけにはいかない」と言うと、張郃が諫めて言った。

「これは法正の計略にほかなりません。將軍には出陣なさってはいけません。ひたすら堅く守ったほうがよろしい」

「向かいの山を占領されれば、こつちのようすは丸見えだ。どうしても出陣して戦わずにいられようか」と夏侯淵。

張郃がきつく諫めても聞き入れず、夏侯淵は軍勢を分けて向かいの山を包围し、大声で罵りながら戦いを挑んだ。

山上の法正が白旗をあげたので、黄忠は夏侯淵があれこれ罵倒しても取り合わず、出て戦おうとしなかった。

午の刻うま（正午）がすぎると、夏侯淵軍は疲れて来て、志気しきが衰え、大半の者が馬を下りて休息しはじめた。これを見た法正が紅旗をふった瞬間、太鼓や角笛がいつせいに鳴り響き、

関とぎの聲があたりを震ふるわせた。

黄忠は単騎でまっさき駆けて攻め下ったが、その勢いは天落ち地も崩れんばかり。夏侯淵が慌てふためいていると、黄忠は蓋かさの下まで攻め寄せ、雷のとどろきのような大声を張り上げて一喝いっかつした。

夏侯淵は迎え撃つ暇いとまもなく、黄忠の刀がふりおろされた瞬間、頭から肩までバツサリ一刀断ひとにされていた。黄忠が夏侯淵を斬ると、夏侯淵軍は総崩れとなり、命からがら逃げ散った。

(解説)

老将黄忠は、今回も敵の大將かこうえんの夏侯淵を討ち取る大手柄をたてます。劉備は大喜びして、黄忠に征西大將軍の称号を加えます。いっぽう、曹操は黄忠を深く恨み、夏侯淵の仇を討つべく、みずから大軍を率いて定軍山へ向かいます。